

この記事は、学園内広報誌『川崎学園だより』に今年2月から連載中の「川崎学園ヒストリア」の記事をもとに作成しております。「川崎学園ヒストリア」では、学園の精神に連なることばやエピソードをご紹介しています。連載中の記事は、KAWASAKI CLUBのWebサイトの特設コーナーでご覧いただけます。



川崎祐宣先生 今年、生誕112周年／没後20年

学校法人川崎学園創設者 川崎祐宣先生は、医療、医療福祉、医学医療教育の三大事業を完遂されましたが、その歩みは、附属川崎病院の前身である外科昭和医院の昭和13(1938)年の開院に始まります。それから78年、附属川崎病院は今年12月1日、新築移転し「川崎医科大学総合医療センター」として新たなスタートをきります。



終戦の翌年、現在地に再建された外科川崎病院。焼野原に復興した病院は市民にとって安心的であった。

- 1939 外科川崎病院開院
- 1938 外科昭和医院開業
- 1950 財団法人川崎病院設立
- 1956 財団法人旭川莊創設
- 1960 総合病院川崎病院開設

戦前・戦中の川崎病院



前列向かって一番左が川崎明徳学園長
二人おいて川崎祐宣院長

広い敷地内に、入院の棟、外
来の棟、その後ろに住まいがあつて、私たちはそこに住んでいました。当時から『年中無休・昼夜診療』を掲げていて、最初、医師は父(祐宣)一人で、朝出て行って夜戻る、夜中も救急、往診に行くという状態でした。私はかなりヤンチャだったようで、しきつちゅう父に叱られていきました。

川崎明徳学園長(前理事長)
に、この写真についてお話をうかがいました。

「最初の外科川崎病院は、現在の附属川崎病院の道路を隔てて斜め前で、閉院して空いていた武藤小児科病院を借りて昭和14年に開院しました。

広い敷地内に、入院の棟、外
来の棟、その後ろに住まいがあつて、私たちはそこに住んでいました。当時から『年中無休・昼夜診療』を掲げていて、最初、医師は父(祐宣)一人で、朝出て行って夜戻る、夜中も救急、往診に行くという状態でした。私はかなりヤンチャだったようで、しきつちゅう父に叱られていきました。

昭和16年には隣の福武病院(出征して空家)も借りて病院を拡張、宮崎から前田副院長が看護師を連れて応援に来てくれていました。病院の評判もよく、また当時は召集されて医師も少なく、閉める医院も多くて、患者さんは増える一方でした。受付窓口には、『医療費にお困りの方は御遠慮なくお申し出ください』と貼り出してありました。

昭和18年に病院はまるごと臨時海軍病院に徵用され、祐宣院長は現地徵用で海軍軍医に任官しました。昭和20になると前田副院長が召集され、祐宣院長も6月19日から7月20日まで戸塚の海軍病院へ徵集されていて、岡山大空襲で病院が全焼した時は不在でした。※

この写真は福武病院の屋上で、天満屋が後ろに見えます。昭和17年、私が深堀小学校3年生の頃の写真だと思います。」

(ヒストリア [2] より)

※焼け残った市街地北部の眼科病院を借りて8月15日には診療を再開した。

再開記念の杯をあげていた最中、終戦の玉音放送が始まった。



2011 岡山市と基本協定



2013.9.26
新病院起工式

川崎学園と基本協定



医科大学は現在の医療短期大学の校舎を使
いスタートした。左上に「川崎医科大学」の文字